

日英戦争の遺したもの(1)

——『ビルマの豎琴』と『アーロン収容所』——

原 田 俊 明

はじめに

本稿では戦争そのものではなく、日英戦争の記憶に基づく戦後の話題作を考察する。題名に掲げた日英戦争という用語は世界史や日本史の教科書に掲載がなく、一般にも馴染みがない。良きにつけ悪しきにつけ、日清、日露、日中の各戦争が暗記すべき用語として歴史教科書に載っているのとは対照的である。そのため筆者が過去に行なった教員学術研究会の口頭発表では発表仲介者の助言もあり「日英戦争」と鉤括弧つきにした¹。

1863年8月中旬に薩摩藩と英国海軍が3日間に亘り交戦した、日本側の言う薩英戦争、英国側の言う鹿児島砲撃(the bombardment of Kagoshima by the Royal Navy)を日英戦争に含めるのか否かという疑問も湧いてくるが、筆者がここで言う日英戦争とは太平洋戦争(当時の言い方で大東亜戦争)の一環、つまり1941年12月8日(月)の開戦から45年8月15日(水)の終戦、或いは同年9月2日(日)の降伏文書調印までの交戦状態を指す。

日米戦争という用語は、NHKなどの報道機関によって頻繁に用いられたことで人口に膾炙している。加えて第一次世界大戦におけるドイツ帝国との交戦は日独戦争として近年では学術書の題名になり²、2006年2月以来、ウィキペディア日本語版の見出し語にも掲げられている。本稿では日独戦争の例に倣い、併せて日英同盟(Anglo-Japanese Alliance, 1902-23)の裏返しという意味合いを込めて日英戦争という用語を用いる。

日英戦争を題材とする戦後の書物或いはその映画化作品から、我々は当時の英国人、日本人の姿が推察できる。本稿では、戦後日本のベストセラー『ビルマの豎琴』と『アーロン収容所』を読むことで、当時から現代に引き継がれた主として日本人の意識をさぐりたい。

次稿以降では、英国人の見た日本軍に関する刊行物、映画等について考える。

1 『ビルマの豎琴』

戦争の爪痕がまだ生々しかった頃、子供向けの中篇小説(或いはお伽噺か)として竹山道雄(1903-84)の『ビルマの豎琴』(1948)が刊行された³。

この小説は、作中で名を与えられぬ一日本兵による語りという形式を採っている。この兵は日本の敗戦に伴って小隊もろとも日本降伏軍人(JSP: Japanese Surrendered Personnel)としてムドンの英軍管理下の捕虜収容所に送られ、強制労働の日々を送る。小説はこの無名日本兵から見た小隊の様子が中心である。音楽学校出身の井上隊長が戦時にあっても合唱の指揮をとり、隊の結束は固い。軍歌や兵隊ソング(しばしば厭戦的・頹廢的という理由で当局に禁止された唄もあるが)や流行歌(兵隊ソング同様に禁止された唄もある)の類いなら他の小隊でも一部の兵が自発的に口ずさんだであろう。しかし

井上小隊が合唱で歌う曲はそうではなく、ドイツやイタリアの名曲や英国各地（イングランド、アイルランド、スコットランド）の民謡の日本語版である文部省唱歌なのはなぜだろう。隊長が音楽学校出身ということで、日本のどこか泥臭い通俗的な唄を嫌ったのだろうか。作品中、理由は特に明かされない。

この小隊に於いては、ビルマの豎琴の演奏を部隊内で行なう水島上等兵の特異な存在が目を引く。水島は終戦前にはビルマ服（longyi）を着て斥候に出て、豎琴（saung）による音楽暗号を小隊に送る芸当もやってのけたとのことである。

その頃、日本国内（当時の言葉で内地）の大都市の殆どは米軍の空襲で焦土と化し、一般国民も戦地の兵士たちも飢えに苦しんでいた。日本人の大多数は戦地も含めて日本降伏の知らせを、おそらくは諦念と安堵の入り混じった気持ちで受け入れたことだろう。しかし降伏を潔しとせず、天皇の命に背いてでも、或いはその命令が敵によるデッチ上げであるとして、最後の最期まで闘わんとする日本軍将兵もいたことが知られている。小説『ビルマの豎琴』の中では、山奥の三角山で抵抗を続ける日本軍小隊が登場する。そしてその小隊への危険な説得任務に水島上等兵が志願して就く。しかし水島は消息を絶ってしまう。

小説の大部分は水島の消息についてあれこれ憶測することにページが割かれている。戦友たちは、収容所の近辺で見かけるビルマ僧が水島らしいと思って話しかける。しかし件のビルマ僧（実は水島）は黙して答えない（第二話「青い鸚哥」）。すべてが明らかになるのは水島本人が認めた長文の手紙を井上隊長が日本への帰還船上で、隊員に向けて音読する場面（第三話「僧の手紙」）である。

手紙によれば水島は三角山での説得に失敗し、その頑迷な小隊は抗戦してしまう。水島は命こそ助かったが崖から転がり落ち、通りかかった非ビルマ系の少数民族カチン族に助けられる。水島は彼らの介抱を受け、毎日ご馳走を供されるが、彼らが人喰い人種であり、水島を生贄にしようとしていることを知る。しかしその儀式の最中に水島は咄嗟の機転で得意の豎琴を奏で、精霊の祟りを鎮めるような様子を見せる。人喰い人種たちは水島の神通力に感心し、水島に僧衣と腕輪を贈り、盛大に送り出す。

この箇所はビルマよりむしろニューギニア辺りの未開の島嶼を連想させる。作者の頭には或いは『ロビンソン・クルーソー』（Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, 1719）の一挿話が浮かんだのであろうか。児童の読者に向けて書かれたことを念頭に置くと、人喰い人種という道具立てには作品を劇的にする効果が認められよう。

ビルマ僧の姿でムドンの収容所を目指す水島だったが、道中で目にするのは夥しい数の日本兵の死体だった。朽ち果てて蛆が湧く遺体に衝撃を受けた水島だったが、敵である筈の英軍が日本兵の遺体を丁重に葬ってくれている様子を道中目撃して感銘を受ける。水島は英霊を適正に葬るべく、ビルマの地に留まる決心をする。斯くして出家し、本物のビルマ僧になったのだった。

小説の最後近くで井上隊長が隊員たちに音読して聴かせる水島の手紙は、祖国日本や仲間の隊員たちへの愛惜の想いと、死者を弔うビルマ僧としての決意で結ばれている。

なお、この小説の単行本の刊行から8年後には市川崑（1915-2008）監督による白黒映画『ビルマの豎琴』（1956年公開）が国内外で上映されて好評を博した⁴。映画で描かれた個々の場面は、原作のほぼ忠実な描写と言えよう。原作では一番肝心なところ、つまり失踪した水島上等兵が、草むす屍^{かばね}となった日本兵を供養することに生涯を捧げようとする決意は、最後近く、水島からの封書の開封までは、

小隊の仲間にも私たち読者にも明かされないままである。これは小説が同僚の日本兵による語り(narrative)の手法で書かれているためである。しかし映画ではもっと早い段階で、フラッシュバックの手法を用いて視聴者に秘密を明かしてしまう。

先に述べたように、小説では終戦後もなお降伏を拒み続ける小隊の説得工作に失敗した水島は、崖から転がり落ち、人喰い人種の介抱を受ける。今後の儀式の際に水島を喰い殺そうという意図をもってのことである。しかし映画ではこの場面の代わりに、水島が見知らぬビルマ僧に助けられる設定になっている。彼は恢復すると恩知らずにもその命の恩人の僧服を掠め取って逃げてしまう。こうして僧侶のいでたちで、水島はムドンの捕虜収容所を目指して徒歩で進むのであるが、ここからまた原作を忠実になぞるようになる。

原作では与えられた僧服、映画では盗んだ僧服だが、これを着ている水島が偽の僧侶であることには変わりがない。この時点での水島は日本軍の一敗残兵でしかない。しかし水島は本当に出家する。そしてビルマの大地が水島を真の僧侶に変えていく。或る意味に於いて「嘘から出たまこと」を地で行く水島であった。一方では望郷への思いが募るが、死者を弔うことを天職とすべく、隊への帰還も日本への帰国も断念する。ここには精神的な葛藤がある。祖国に帰るよりもこのビルマに残って、祖国のために散っていった者たちを手厚く埋葬して供養することに一生を捧げる決意である。無名戦士を肅々と弔う無名僧侶の覚悟である。

小説も映画も、その大きなテーマは音楽が人の魂を癒すということであろうか。水島上等兵の奏でる豎琴は、戦時には斥候に出た際の音楽暗号として役立ったし、日本降伏後は人喰い人種から自らの命を護ることに役立った(但し、人喰い人種云々は原作にのみ該当し、映画では描かれない)。これらは音楽の謂わば功利的な使用である。

しかしこの小説では、音楽による感きわまらんばかりの情の高ぶりも描かれる。第二話「青い鸚哥」の最後で、日本へ帰還する井上小隊にビルマ僧となった水島が豎琴を弾いて贈るのは、「「あおげばとおとし……」という、あの別れの歌でした。」とある⁵。

仲間内での感情の高ぶりに留まらない。音楽は敵味方をも超越する。井上小隊の歌う「埴生の宿」と「庭の千草」の合唱に呼応するかの如く、日本軍の武装解除に動き出した英軍がこれらの原歌であるイングランド民謡“Home Sweet Home”とアイルランド民謡“The Last Rose of Summer”を歌い、戦争で敵対する相手との精神的な架け橋が生まれる。言葉だけでは表せない感情がそこにあるのだ。読者はそこに音楽のもつ力を見る。

小説の第一話「うたう部隊」終盤を、漢字表記を新字体に改め以下に引用する。

急にあたりが暗くなりました。熱帯ですから、昼と夜の境がはつきりとして、日が落ちるとたちまちにまつくらになるのです。これはこちらにとってはこの上なく有利なことでした。もうほかの準備もすつかりできました。あちらこちらの暗い物蔭に、三人五人ずつつくまって、銃の引金に指をかけています。隊長も指揮刀に手をかけて、突撃の命令を下す瞬間を待つて、敵の方をじつと睨^{にら}んでいます。

車を首尾よく引きこんだときには、「はにゆうの宿」の合唱がちょうど終ったときでした。

隊長は指揮刀をすらりと抜きました。車を引きこんだ者たちも、歌をやめて、銃をとりました。そのしばらくの静寂のあいまに、はるかかなたの谷底の水の音がにわかに高まって、はつきりと聞こえました。

すこし前まで賑かにさえずりかわしていた鳥も、もうすつかり寝しずまりました。

隊長は刀をあげました。

兵隊たちは突貫のウォーッという声をあげかけました。

そのとき——、ふと、隊長はのどまで出かけていた号令の声をとめて、立ちどまりました。

ふしぎなことには、森の中から、一つの歌の聲があがったのです。あかるい、高い声で、熱烈な思いをこめた調子で、「はにゆうの宿」をうたっているのです。

隊長はもう走りだした一人の兵隊をつかまえました。そうして、両手をひろげて、うしろから飛びだそうとするわれわれを押しとめました。

「まで！」と隊長は大きな声で叫びました。「あの歌をきけ！」

森の中の歌声はたちまち二つ三つと数を増し、ついにはあちらからもこちらからもそれに和わしました。そしてそれは「はにゆうの宿」の節を英語で「ホーム・ホーム・スキート・スキート・ホーム」とうたっているのです。

われわれは顔を見あわせました。これはどうしたということだろう？ 森の中にいるのは、われわれの命をねらうおそろしい敵ではなかったのだろうか？ 村の人々だったのだろうか？ それならこんな心配をするのではなかった。そう思うと、にわかにはつとしました。そうして、武器を下におきました。

森の端の方では、別の一団の聲が「庭の千草」の節をうたっています。しかし、それも「……ザ・ラスト・ローズ・オヴ・サンマー……」と英語です。

森の中は歌の聲で一杯になりました。とおくの川の崖の蔭からも、合唱がおこりました。われわれもそれに合わせてうたいました。

月が出ていました。涼しげな青い光が、あたりを一面にそめています。樹々のあいだは、ガラスの柱を幾本も立てたようになっていました。その中を、森から広場へ、人影がばらばらと走り出てきました。

よく見ると、それはイギリス兵でした。

かれらはいくつもの塊になって合唱しています。思いをこめて「スキート・ホーム」や「ザ・ラスト・ローズ」をうたっているのです。「はにゆうの宿」も「庭の千草」も、日本人はこれがむかしからの日本の歌だと思っていますが、もともとはイギリスの古い歌の節なのです。ことに「はにゆうの宿」はイギリス人が自慢をするかれらの家庭の楽しみをうたったもので、すべてのイギリス人は、これをきくと、自分たちの幼かった頃のこと、母親のこと、故郷のことを思うのです。それが、こんなビルマの山の中で、危険きわまりないと思っていた敵を包圍していたときに、その敵がしきりにうたっているのをきいたのですから、何ともいえない異様な感動をうけたのです。

こうなるともう敵も味方ありませんでした。戦闘もはじまりませんでした。イギリス兵とわれわれとは、いつのまにか一しよになって合唱しました。両方から兵隊が出ていつて、手を握にぎりました。ついには、広場の中央に火をたいて、それをかこんで、われらの隊長の指揮で一しよにこれらの曲をうたいました。

一人の背の高いインド兵が、ポケットから家族の写真を出して、うたいながら焚火の光でながめていました。彼は頭を白い布で巻いて、黒い頬鬚をはやして、堂々とした威厳のある様子をしていましたが、目は実にやさしくて羊のようでした。彼はその写真をわれわれにも見せました。写真には、奥さんと二人の子供が椰子の木の下に笑ってうつっていました。この人はカルカッタの商人だということでした。

一人の何国人だかよく分からない兵隊は、われわれにも家族の写真を見せろ、といいました。一人の戦友が日本のお婆さんの写真を出すと、彼はそれを頬にあてて、接吻をしました。

一人の血色のいいイギリス兵が「イフ・ア・ボディ・ミタ・ボディ……」とうたいました。それと同じ節を、一人の日本兵が「夕空はれて……」とうたいました。すると、そのイギリス兵は日本兵と肩を組んで、あたりを大股おおまたに歩きました。日本兵は「ああ、わがはらから、たれとあそぶ」と声をはりあげました。ここ

で、またあたらしい合唱がはじまりました。

水島はさまざまな合いの手を入れて、これに伴奏しました。これはイギリス兵からも非常な喝采をうけました。彼が焚火の炎に半面をてらされながら弾いている顔を見ると、頬には涙がながれていました。それを見て、どこの国の兵隊も涙をながして一しよにうたいました。

この夜、われわれはもう三日前に停戦になつていたことを知りました。イギリス軍はあくまでも凶悪だと思つていたわれわれにそれを知らせる法もなく、残敵掃蕩のためには、ことによつたら殲滅もやむをえない、と思つていたのです。われわれは武器をすてました⁶。

感動的な場面である。戦争終結を知らずにいた日本軍の井上小隊が、知ってか知らずか英国各地の民謡を日本語詞で歌っている。夜闇に紛れていざ敵英軍を襲撃せんという緊迫した場面で、向こう側に居る英軍将兵らが文部省唱歌の馴染みの旋律を英語で歌う光景に出くわす。にわかに戦意を喪失した日本軍将兵たちもそれに呼応し、唱和するのである。原文には「もう敵も味方ありませんでした」とある。

スコットランドの艶唄 “Comin’ Thro’ the Rye” を歌う英兵と、同一メロディーに乗せて「ああ、わがはらから、たれとあそぶ」と、しかつめらしく小学唱歌「故郷の空」を歌う日本兵の対比は興味深い。日英双方の歌詞を知る読み手は、久米正雄（1891-1952）流に言うならば「微苦笑」を禁じ得ない⁷。

この小説が世に出た当時、日本の一般国民は日本軍による連合軍捕虜やアジア人労務者の虐待や、その結果としての英豪軍による復讐裁判や私刑の類い（私的制裁については豪州軍が特に悪名高い）について知る由もなかった。作者の竹山も日本に居て知らなかった。また、後述する『アーロン収容所』で描かれたような、戦後もまだ消えぬ相互不信や憎悪の念も感知しなかった。

では、「もう敵も味方ありませんでした」という話はつくり話だろうか。然り、作者の理想の表出に過ぎない、と筆者は断定する。明治36（1903）年生まれの水島道雄は旧制第一高等学校でドイツ語・ドイツ文学の教鞭を執る教授として、大正生まれの若者が出征していくのを見送った立場である。自ら軍務に就いたり戦地に赴いたりした経験はない。したがって竹山の描くビルマ戦線は、他人の体験談から受けた印象と自らの想像の産物である（ビルマ戦記の数々が巷で刊行されるのはこれより後のことだ）。そのせいか現地の上座仏教（Theravada Buddhism）が戒律により僧侶に音楽演奏を禁じている事実と符合せず、僧侶に扮した水島上等兵がビルマの豎琴（saung; the Burmese harp; the harp of Burma）を奏でることは禁忌（taboo）の部類に入るのであり、現地文化を離れた創作物となっている。竹山は当初、日中和解の話を企図していたことを後年述べている。しかし日中間では共通の歌が思い浮かばなかった⁸。そこで日本人が子供の頃から歌っていて、尚且つ自国の歌だと思っている「庭の千草」「埴生の宿」「故郷の空」「螢の光」の原曲を擁するイギリス人を和解の相手としたのだ⁹。

では、この感動的な場面はいったい何に由来するのか推察してみよう。それは竹山がドイツ文学の教授であり、昭和初期には文部省によってベルリンとパリに在外研究のため3年間に亘り派遣されていたことと関係があるだろう。第一次世界大戦中にベルギーの戦場で英独両軍の間で非公式に実施された1914年クリスマス停戦¹⁰、1915年クリスマス停戦、1916年イースター停戦について竹山が何らかの知識を持っていたことは想像に難くない。わけでも1914年の停戦は、英国人に今も語り継がれる美談となっている¹¹。竹山はこうした英独間の人道挿話を基に小説を書いたのではなかったか。日

英間でもそんなことがあったら、という願望を込めて。

次項で会田雄次を読むが、竹山よりも13歳（学齢では12歳）年少の会田は「熱心な竹山先生の読者」であり、著書を通じて「学恩」を蒙っている旨を述べている。実際、竹山が戦後ドイツに滞在し、ドイツ文化ひいては基督教に根ざした西欧文明そのものを厳しく批判していく旅行記「剣と十字架」（『文藝春秋』1961年4月号から翌年4月号まで連載）は、会田曰く「私の年来の疑問に大きな光明を与えるものであった。」とのことである。しかしその会田にして『ビルマの豎琴』は、「きれいごとを過ぎて共感できなかった」代物なのである¹²。

2 『アーロン収容所』

しかし現実には竹山教授の描くほど甘いものではなかった。ここで戦後のロングセラーとして名高い会田雄次（1916-97）の『アーロン収容所』（1962）を読む。「まえがき」を部分的に引用する。

やっぱり、とうとう書いてしまったのか。まえがきを書こうとすると、どうしてもこのような感慨がまず最初に浮かんでくる。

（中略）武装解除された私たちの師団はラングーンに送られ、そこで約二年間、英軍の捕虜としてはげしい強制労働に服させられたのである。

この経験は異常なものであった。この異常ということの意味はちょっと説明しにくい。（中略）

想像以上にひどいことをされたというわけでもない。よい待遇をうけたというわけでもない。たえずなぐられ蹴られる目にあったというわけでもない。私刑的な^{リンチ}仕返しをうけたわけでもない。それでいて私たちは、私たちはといっていけなければ、すくなくとも私は、英軍さらには英国というものに対する燃えるような激しい反感と憎悪を抱いて帰ってきたのである。異常な、といったのはそのことである。

（中略）このままでは気がすまなかった。私たちだけが知られざる英軍の、イギリス人の正体を垣間見た気がしてならなかったからである。いや、たしかに、見届けたはずだ。それは恐ろしい怪物であった。この怪物が、ほとんどの全アジア人を、何百年にわたって支配してきた。そして、そのことが全アジア人のすべての不幸の根源になってきたのだ。私たちは、それを知りながら、なおそれとおなじ道を歩もうとした。この戦いに敗れたことは、やはり一つの天譴^{けん}というべきであろう。しかし、英国はまた勝った。英国もその一員であるヨーロッパは、その後継者とともに世界の支配をやめてはいない。私たちは自分の非を知ったが、しかし相手を本当に理解したであろうか¹³。

また、「イギリス人の残忍さ」と題した項目の結びにはこうある。

とにかく英軍は、なぐったり蹴ったりはあまりしないし、殺すにも滅多切りというような、いわゆる「残虐行為」はほとんどしなかったようだ。しかし、それではヒューマニズムと合理主義に貫かれた態度で私たちに臨んだであろうか。そうではない。そうではないどころか、小児病的な復讐欲でなされた行為さえ私たちに加えられた。

しかし、そういう行為でも、つねに表面ははなはだ合理的であり、非難に対してはうまく言い抜けけるようになっていた。しかも、英軍はあくまでも冷静で、「逆上」することなく冷酷に落ちつき払ってそれをおこなったのである。ある見方からすれば、かれらは、たしかに残虐ではない。しかし視点を変えれば、これこそ、人間が人間に対してなすうるもっとも残忍な行為ではなかろうか¹⁴。

こう書いた会田教授の敗残兵としての苦しみには同情を禁じ得ないが、著者の言う「もっとも残忍

な行為」とは、この結論に先立つ1段落が根拠の一つとなっている。日本陸軍鉄道隊の運命についてである。その鉄道隊は泰緬鉄道 (the Siam-Burma Railway)¹⁵ でイギリス人捕虜を酷使・虐待して多数を死に到らしめた嫌疑をかけられていた。終戦後はBC級戦犯法廷で裁きを受けるべくイラワジ河の中洲に収容されていた。潮がさしてくると水浸しになるような場所で、薪の材料もない。英軍から支給される食糧は乏しく、未決囚たちは飢えに苦しみ、河を歩く渡りカニに手を出した。カニがアメーバ赤痢 (会田の原文ではアミーバ赤痢) の温床であることは日本兵たちも承知しており、英軍も病原菌がいるという理由でカニの生食を禁じていたが、食べずにはいられない。

「(中略) そしてみんな赤痢にやられ、血便を出し血へどをはいて死にました。水を呑みに行き力つき、水の中へうつぶして死ぬ、あの例の死に方です。看視のイギリス兵はみんなが死に絶えるまで、岸から双眼鏡で毎日観測していました。全部死んだのを見とどけて、『日本兵は衛生観念不足で、自制心も乏しく、英軍のたび重なる警告にもかかわらず、生ガニを捕食し、疫病にかかって全滅した。まことに遺憾である』と上司に報告したそうです。何もかも英軍の計算どおりにいったというわけですね」¹⁶

と語るのは、著者が強制労働の現場でたまたま出会った日本人捕虜である。終戦前に運悪く英軍の捕虜になった日本人が自らの境遇を恥じて、会田のような終戦後の降伏軍人とは口をきかない中で、一人だけ著者と言葉を交わした人物である。「関東の人で、名も所属も言わない。」¹⁷ とある。「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ」の詞で悪名高い『戦陣訓』¹⁸「本訓 其の二」「第八 名を惜しむ」に皆が洗脳された時代であるから当然であろう。日本軍の特異な体質の犠牲者であるとも云える。

しかし「イギリス人の残忍さ」の根拠としては薄弱である。「まえがき」に「この本に書いたことは、できるだけ客観性も持たすためなるべく伝聞を避け、私自身の体験を主にした。」¹⁹ とあるが、肝心の箇所が伝聞である。しかもこの「関東の人」とてカニの生食による絶命の話は証言ともとれるが、多分に尾鰭がついている可能性がある。「人間が人間に対してなすもっとも残忍な行為」²⁰ なる大胆な仮説を裏づける根拠としては不足している。

筆者はむしろ会田教授のイギリスに対する反感や憎悪の念は、次のくだりに由来するものであると考えている。

(前略) しかし士官は老人以外はほとんどが堂々たる体軀で私たちを圧倒した。かれらに接したときほど日本人の体格のみじめさを感じたことはない。十七貫 (六四キロ) ちかくにはなっていた私などでも、かれらと比べるとまるで蚊トンボであった。しかも体格だけではない。動作が生き生きとして自信にみち、しかも敏捷であるのが目立つ。

どうしてこういうことになったのであろうか。英軍の階級制度は日本とはちがって一般の社会構成をかなり正確に反映している。一般人が応召した場合、短い訓練期間ののち、かれらはもとの社会的地位にふさわしい階級を受け、それに適合した兵種にまわされるのがふつうである。ことに階級と社会的地位はよく対応する。極端な場合かもしれないが、次の例を示すことができる。

私たちの主な作業場の一つにイラワジ河岸に設けられた造船・修理場があった。ここには英本国の二、三の造船工場から召集された人が多く来ていたが、もとの造船工場の階級がそのまま適用されていた。伍長は職工組長、会計係長は中尉、会計課長は少佐、工場長は大佐、技師は大尉や中少尉というふうにある。

私はほんの少し英語ができ、ときどき通訳めいたことをやらされたので、二、三の将校に、お前は何者だ

と質問された。「京大を出て、あるカレッジの講師をしている」というと、ウソを言うなと叱られるのが常であった。大学を出た男が兵卒であるはずがない、講師であれば中尉以上にはなる、お前はスパイ役か何かの特務工作員で英語の訓練を受けた男ではないか、と疑うのである。

こんな会話の下手な特別工作員があるはずはないが、日本軍の将校で英語のまるでできない人が多かったのでこういう質問も出たのだろう。しかし私の会話力では、日本軍の特殊性を説明し納得させることはとてもできなかった。あいにくかれらは、日本憲兵の悪印象から、こういう特務工作員めいたものを憎んでいたもので、私などひどい目にあわされたこともあった。

この例が示すように、英軍の階級は社会秩序をそのまま反映しているといえる。とくに士官と下士官・兵との間には、これでも同じイギリス人かと思われるほどの差がある。士官はいわばホワイト・カラーであり、下士官・兵は労働者である。下士官・兵にもホワイト・カラーが少しはいるが、それは幹部候補生としてのそれではなく、下積みの事務屋である。

このこと自体は別に不思議でない。近代国家のなかで日本だけが特殊なのである。(後略)²¹

大正5(1916)年生まれで万年初年兵だった会田は、流暢ではないにしても英会話ができ、高度な英語の読み書きすらこなす若きインテリの大学講師(龍谷大学予科講師)であった。にも拘らず英軍の将校が自分を労働者階級の小僧としか看做してくれないことへの苛立ちや無念さがこの本の全編を貫く通奏低音である。英軍将校の「ウソを言うな」は相当堪えたであろう²²。

上で会田教授も指摘するように、英軍の組織は他の欧米諸国の軍隊同様に実社会の階級を反映した秩序立ったものだが、日本軍の位階制は支離滅裂である。この点を著者が頭ではよく理解していたことは引用文からも判る。名門京都帝国大学で西洋史を修めたあと母校の副手を務めながら近隣の私大で教壇に立っていた知的エリートが一兵卒の地位に甘んじる事態は、英軍にとっては想像の埒外である。知性に於いて会田は英軍将校らに匹敵、ないしは凌駕していたにも拘らず、当時の境遇ゆえ英人から完全に見下された。その点が悔しいのである。

したがって会田教授が憎むべき対象は、大学新卒者を准尉や少尉にいきなり抜擢しておきながら、真っ当な仕事をもった者、それも大学教員を一兵卒として駆りたてた日本軍という特異な組織である。

西欧人道主義の限界、英国人の冷酷さ云々という触れ込みだが、この本に描かれた英人を貫くものは「冷酷」とは程遠い「冷徹さ」である。むしろ見上げた根性である。英人は良くも悪しくも日本の「甘ちゃん」の対極に位置している。会田教授自身、「騎士道英国」という項目の中で、実際に接した英軍中尉のことばに心を揺さぶられている。曰く「われわれはわれわれの祖国の行動を正しいと思って戦った。君たちも自分の国を正しいと思って戦ったのだろう。負けたらすぐ悪かったと本当に思うほどその信念はたよりなかったのか。それともただ主人の命令だったから悪いと知りつつ戦ったのか。負けたらすぐ勝者のご機嫌をとるのか。そういう人は奴隷であってサムライではない。われわれは多くの戦友をこのビルマ戦線で失った。私はいずれが奴隷と戦って死んだとは思いたくない。私たちは日本のサムライたちと戦って勝ったことを誇りとしているのだ。そういう情けないことは言ってくれるな」²³ と。これを受けての会田教授の感想は、「相手を勇気づけようとする好意があふれていて、頭がさがる思いであったが、その反面、勝者のご機嫌とりを察知されたことに対する屈辱感というものは何ともいえないものであった。」²⁴ とある。そして「ヨーロッパ人には、いったん自分がとった重大な行動の責任は、どんなことがあってもなくならないとする考え方がある。また一度やりだしたことは都合が悪くなくても、いや悪いと思っても断じて曲げないほうが立派で男らしいのだとい

う考え方も、私たちの想像以上に強く深く広く根を張っているようである。(後略)』²⁵ と結論づけている。

また、会田教授は「イギリス兵の責任感」という項目でこう述べている。

(前略) かれらは実に責任感が強い。言ったことはかならず守る。私たちが感心したその一例をあげてみよう。(中略)

そのイギリス兵は、ゆっくり何事かを話した。「私の責任で仕事を終えさせた」と言っているらしい。中尉は承知しない。両方の声がしだいに大きくなり、とうとう中尉はその兵を突きとばしてしまった。私たちはこの兵士に感謝したが、同時にこれはえらいことになる不安があった。兵士が反抗したら上官に対する罪になる。イギリスの軍紀は厳正だから位階を下げられるぐらいのことになるかもしれない。兵士の身の上を心配した同僚も集まって来た。こうなると階級の対立である。

しかし話はまとまった。私たちは新しい仕事を課せられた。(中略) そのとたん新しい監督の下士官は「オーケ」と言って作業を止めさせた。

「よろしい。小屋はこわれた。私たちはこわせとittedだけで、こわしたあとを片づけろとはいわない」

こう言ってかれは、行ってしまった。この間五分、一種の大岡裁きである。しかし例の伍長は、この相談がまとまったときも不興気で、日本の中尉に、

「英軍が約束にそむいた。まことに遺憾であるが許してくれ」

と言いに来たそうである。

こういうことは、私たちにも、インド人の世界にもないことであった。私たちは自分を日本帝国そのものだと考えるような気概はなかった。(中略) 日本軍の、命令には絶対服従というのは、長いものには巻かれるという心理の基礎の上に立っている。その長いものが正義の具体像でないかぎり拒否すべきだというイギリス人のような信念は持てなかったようである²⁶。

このように会田教授は客観的な視点で英軍人の美点を認めている。「英軍さらには英国というものに対する燃えるような激しい反感と憎悪を抱いて帰ってきた」²⁷ とする著者にして感服しているのは意外な感もある。

玉音放送を受けて図らずも生きて虜囚となった皇軍将兵にとって、英領ビルマの英軍管理下の収容所は決して居心地の良いものではない。同時期に米軍の厄介になった捕虜のほうが、与えられる食糧も豊富で、余程「人道的な」待遇を受けたのも事実だ。しかし日本軍に捉われて「人間はどこまで残酷になりうるのか」という命題を突きつけられた連合軍捕虜に比べれば、殊更に論^{あげつら}すべき非も英軍にはない。その点は原著刊行の4年後に『アーロン収容所』の英訳がイギリスで刊行²⁸されたときの反響にもあらわれている。「書評には好意的なものもあったが、読者からは相当激しい反論が著者のところへ寄せられた。日本人は私たちイギリス人捕虜の耳を剃りおとし、男根を切り、目をえぐった。そんなことをイギリス人がやったかといった種類のものが大部分である。」²⁹ と著者自身による「文庫版のためのあとがき」にある。

『アーロン収容所』のところどころに散りばめられたユーモア感覚は、奇しくも英国的ですらある。たとえばグルカ人の看視兵から英軍物資を盗み出すくだり (p. 129) は秀逸である。「文庫版のためのあとがき」の最後のほうに「高度成長期の日本の方々に、捕虜の悲惨さなどを追体験してもらうのは無理だと考えたのと、自分の経験を深刻そうに語るというのは照れくさいので、記述に多少のカリカチュアライズを試みた」³⁰ とある。これほどの諧謔味と学識をもった日本人学徒・学究であれば、も

っと早く生まれて戦前の英国に留学していれば、或いはもっと遅くに生まれて戦後の英国に客員研究員などの肩書きで滞在していれば、きっとまるきり違った英国観をもつことになったであろう。彼を嫌英に向かわせてしまった日本軍の奇怪な位階制に問題があったのではなからうか。

古典的名著の誉れ高い著書を批判的に読んだつもりだ。ややもすると過度に親英的の誹りを受けるやも知れぬが、内容に至らぬ部分の多いことを認め、読者諸賢のご教示を賜りたい。

注

- 1 昭和女子大学英語コミュニケーション学科・文化創造学科合同教員学術研究会（2010年2月17日）のこと。本稿もその口頭発表『日英戦争』の記憶」に基づく。
- 2 富田弘、富田弘先生遺著刊行会『板東俘虜収容所一日独戦と在日ドイツ俘虜』（Tokyo: 法政大学出版局, 1991 & 2006）。
- 3 初出は青少年向けの雑誌「赤とんぼ」。1947年3月から1948年2月まで連載。当初思い描いた読者層ばかりか意外にも大人の間でも人気が出て、単行本化され、ベストセラーとなった。
- 4 映画の英題は *The Burmese Harp* であるが、映画の公開から10年後に原作が英訳された際の題名は、*Harp of Burma* である（Michio Takeyama. Trans. by Howard Hibbett. *Harp of Burma*. Rutland, VT: Tuttle, 1966）。映画は1956年ヴェネツィア国際映画祭サン・ジョルジオ賞を受賞し、1957年アカデミー外国語映画賞にもノミネートされた。29年後には同監督が別の俳優を使い（但し、物売りの老婆役の北林谷榮（1911-2010）だけは同じ役で両方に出演、1956年版で伊東軍曹役だった浜村純（1906-95）が1985年版では現地の村長役で出演）、カラー映画『ビルマの豎琴』（1985年公開）を制作・公開したが、海外では前作ほど話題にならなかった。しかし馬場公彦『「ビルマの豎琴」をめぐる戦後史』（Tokyo: 法政大学出版局, 2004）p. 160によれば、国内では当時の日本映画史上第2位の配給収入を得たそうである。英国の脚本家・映画評論家のトニー・レイنز（Tony Rayns, b. 1948）が指摘するように、カラー版『ビルマの豎琴』は、その2年前に公開された年少の大島渚（b. 1932）監督による『戦場のメリークリスマス』（1983年公開）に見られるコマ割りや色づかいの強い影響下にある（Tony Rayns, “*The Burmese Harp: Unknown Soldiers*” <http://www.criterion.com/current/posts/472-the-burmese-harp-unknown-soldiers> アクセス日 2011年9月24日）。なお、『戦場のメリークリスマス』については、拙論の続編で論じたい。
- 5 2011年1月24日（月）の朝日新聞夕刊によると、この文部省唱歌は1871年に米国で出版された“Song for the Close of School”（卒業の歌）の旋律をそのまま借用しているとのことである。これをつきとめたのは、一橋大学の桜井雅人名誉教授である。
- 6 竹山道雄『ビルマの豎琴』（Tokyo: 新潮社, 1955）第一部「うたう部隊」, pp. 31-34。
- 7 ちなみに日英戦争が勃発する少し前の日中戦争（当時の言葉で支那事変）中のことだが、阿部豊（1895-1977）監督の戦時プロパガンダ映画『燃ゆる大空』（1940年公開）の中でも「故郷の空」の場面がある。山田耕筈（Kóscak Yamada, 1886-1965）作曲のタイトル曲「燃ゆる大空」を帝国陸軍航空兵たちが飛行場の敷地に立って高らかに歌った場面の直後に、一人の航空兵が更衣室でシャツを脱ぎながら「故郷の空」をひとり口ずさむのである。英領ビルマ経由の所謂「援蒋ルート」で蒋介石（Chiang Kai-shek, 1887-1975）の中華民国軍を支援していた仮想敵国イギリスの唄だとは、航空兵も阿部監督も、それに映画を後援した陸軍省も、おそらくは知らぬようである。日本の津々浦々まで及ぼした文部省唱歌の影響力たるや斯く許りとは。

『学苑』817号所収「訪日・滞日イギリス人のカルチャーショック」（2008）に書いたが、このスコットランドの艶唄は、年配の日本人には大和田建樹（1857-1910）作詞による郷愁を誘う歌詞「夕空晴れて秋風吹き / 月影落ちて鈴虫鳴く / 思へば遠し故郷の空 / ああ、我が父母いかにおはす」で親しまれている。

「我が父母」が出てくる辺りはそれとなく孝の精神を喚起させる。

しかし英国人にはスコットランドの国民的詩人バーンズ (Robert Burns, 1759-96) 作詞と伝えられるスコットランド英語の原詩 “Gin a body meet a body / Comin’ thro’ the rye / Gin a body kiss a body / Need a body cry? / Ilka lassie has her laddie / Nane, they say, hae I / Yet a’ the lads they smile at me / When comin’ thro’ the rye.” (体と体が出会うとき / ライ麦畑の中をくぐって / 体と体が接吻するとき / 体は泣く必要あるだろか / どこのおなごも彼氏もち / あたしには居ないってこった / でも男子はみんなあたしにニコっとしてくれる / ライ麦畑の中をくぐって / 筆者試訳) のもつエロティックな印象が頭から離れない。

なお、作詞家なかにし礼 (b. 1938) は 1970 年に原詞の味わいに近い訳詞「誰かさんと誰かさん」を作っている。曰く「誰かさんと誰かさんが / 麦畑 / チュッチュッチュッチュッしている / いいじゃないか / ぼくには恋人ないけれど / いつかは誰かさんと / 麦畑」である。原詞では女性の立場で歌っているのに対して、なかにしは男性の視点に置き換えている。

ウィキペディア日本語版 (アクセス日 2011 年 9 月 24 日) によると、ライ麦は「草丈が大人の背丈ほどあるため、夜でなくても畑の中に紛れ込むと、キス以上のことをしても、恥ずかしい思いをすることがないようだ」とのことである。

上記の戦前映画『燃ゆる大空』の「故郷の空」の場面だが、男ばかりのむさ苦しい環境の中、一人の航空兵がシャツを脱ぎながら自らの上半身裸を銀幕に晒し、この艶唄を歌うわけである。そこで現代英国流にやや穿った解釈をこれに施すと、奇妙に同性愛的ですらある。無論、阿部監督の意図ではなからうが。

- 8 実際には高峰三枝子 (1918-90) が歌った 1942 年の流行歌「南の花嫁さん」がある。原曲は、第二次国共合作の新四軍で日本軍と戦って戦死したとされる任光 (Ren Guang, 1900-41) 作曲の「彩雲追月」(1935) である。
- 9 馬場公彦『「ビルマの豎琴」をめぐる戦後史』(pp. 9-10, p. 36) に詳しい。馬場は『新女苑』1954 年 1 月号に掲載された竹山道雄「ビルマの豎琴ができるまで」を証拠として挙げている。
- 10 この停戦は同年 9 月にローマ法王の位に就いたばかりのベネディクトゥス 15 世 (Benedictus PP. XV; Pope Benedict XV, 1854-1922; 在位 1914-22) の呼びかけがあったものの、前線の将兵たちの自発的な停戦であり、英独双方の大本営は認めていない。よって公式の戦史にも記載がない。
- 11 その例としては、Paul McCartney (b. 1942), “Pipes of Peace” (1983) のシングル楽曲販促ビデオ (PV: promotion video) がある。ビデオクリップの中で、マッカートニーは英軍兵士と独軍兵士の一人二役を演じている。他にも The Beatles と同郷のリヴァプール出身のロックバンド The Farm による “All Together Now” (1990) という楽曲の歌詞が、その素材を 1914 年クリスマス停戦に行なわれた英独親善サッカーに負っている。近年では仏独英白とルーマニアの 5 ヶ国合作映画『楽しいクリスマスを』(フランス語原題 *Joyeux Noël*, 英題 *Merry Christmas*, ドイツでも英題を使用、邦題『戦場のアリア』, 2005) がある。出征したきり家に帰してもらえない夫を待ちあぐねたドイツの女性歌手が前線に赴き、敵味方の区別なくアリアを聴かせるという実話に基づく映画である。その音楽のもつ癒し効果は、『ビルマの豎琴』とも共通するところがある。
- 12 会田雄次「竹山道雄先生と私」『竹山道雄著作集 5』月報 (Tokyo: 福武書店, 1983)。なお、類似する感懐として会田は、「深い感銘はうけたものの、実際のイギリス軍との交渉でうけたぬぐい難いかれらへの不信感と、この書に示されているような日本人のイギリスへの信頼と親しみと崇拝感との矛盾は、どう解決したらよいのか判らなかった。」(「ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界」『会田雄次著作集 第八巻』Tokyo: 講談社, 1980, p. 12) と述べている。
- 13 会田雄次『アーロン収容所』(Tokyo: 中央公論社 中公文庫, 1973), pp. 3-5。
- 14 同書, pp. 74-75。

- 15 タイとビルマの国境を結ぶべく日本軍が敷設した軍事目的の鉄道。戦後英国のマスコミは「死の鉄道 (the Death Railway)」と呼ぶ。死者の人数の多さから「枕木一つに一人の死者 (A death for every sleeper; One man died for every sleeper.)」などというレトリックでも知られる。
- 16 『アーロン収容所』, p. 74。
- 17 同書, p. 73。
- 18 1941 年 1 月 8 日 (水) に時の陸軍大臣東條英機 (1884-1948) が示達した訓令。
- 19 『アーロン収容所』, p. 7。
- 20 同書, p. 75。
- 21 同書, pp. 110-111。
- 22 こうした日本軍ならではの实年齢と軍隊階級のややこしい交錯, さらに社会階層と軍隊階級のややこしい交錯から巻き起こる悲喜こもごも (当事者には悲劇, 部外者には喜劇) については, ドイツ文学者の高田里恵子 (b. 1958) の手になる『男の子のための軍隊学習のススメ』(Tokyo: 筑摩書房 ちくまプリマー新書, 2008) と『学歴・階級・軍隊 高学歴兵士たちの憂鬱な日常』(Tokyo: 中央公論新社 中公新書, 2008) が詳しい。前者については人を嘲笑して愚弄するかのような文体は読み手を選ぶが, 後者は戦前日本のエリートたちを襲った運命, つまり戦局の悪化に伴い, 慣れぬ軍隊生活で味わったやるせない日々が, 執拗なまでに細部を穿つ手法で描かれる。
- 23 『アーロン収容所』, p. 76。
- 24 同書, p. 77。
- 25 同書, pp. 77-78。
- 26 同書, p. 118, pp. 120-121。
- 27 同書, p. 4。
- 28 Yuji Aida. Trans. by Hidé Ishiguro & Louis Allen. *Prisoner of the British—A Japanese Soldier's Experiences in Burma* (London: Cresset Press, 1966). なお, 英訳者の一人であるダラム大学仏文科准教授にして日本研究家・軍事史家だったルイ・アレン (Louis Allen, 1922-91) は, 戦時中は英国陸軍情報将校として日本人捕虜たちの尋問に日本語で当たっていた。1964 年 4 月, 京都に会田雄次教授を訪ね, その時点での英国人観を尋ねた際, 会田は生皮を剥がれた蛇の気分になせられた自分たちの抑留体験を述べ, 声を震わせたと上記英訳本あとがき (“A Personal Postscript”, p. 199) に記している。なお, 同様の記述はビルマ戦線に関する大部の自著 Louis Allen. *Burma—The Longest War 1941-45* (London: Phoenix Press, 2000) の p. 608 にも見られる。(初出は London: Dent, 1984)
- 29 『アーロン収容所』, p. 237。
- 30 同書, pp. 237-238。

(はらだ としあき 文化創造学科)